

「推理」することと〈欲望〉すること

——江戸川乱歩「D坂の殺人事件」論——

栗田卓

序

江戸川乱歩テクストの主要な登場人物である「明智小五郎」の初登場作品として知られる「D坂の殺人事件」(「新青年」一九二五年一月)はこれまでに二つの傾向を持つて論じられてきた。一つは、松山巖の指摘¹⁾に端を発する近代的な都市小説として乱歩テクストを読解する試みであり、そこで主題となるのは都市の人間関係の希薄さをテクストの生成要因として同時代的に論証することである。他方は翌月に発表された「心理試験」(「新青年」一九二五年二月)とともに同時代における心理学や精神分析の受容との諸関係においてテクストを読解する試み²⁾であるといえるだろう。これらの読解により、乱歩テクストの可能性が開拓されてきたことは特筆に値する。だが先行研究の手法は、両者がこれまで無関係なものとして分裂して論じられており、そのことでいくつかの可能性を看過している。そのことは、従来の研究におけるテクストの記述レベルでの分析／読解の少なさに象徴されるのだが、都市化／近代化／西洋化という文脈において流通していった「心

理学」や「精神分析」という〈心〉の対象化には、表象を幾何学化し、現象のアウトラインを描き、経験を決定する事象群を配列する〈科学〉という特権的な推進力の本質と分ちがたく結びついた近代化の圧倒的な力が不可欠なのであり、この文脈において〈心〉とは〈科学〉によって認識される存在として理解されるに至るのである。したがって、近代化とは非理性的で非合理的なものとしての〈心〉を理性という〈科学〉の秩序で照らし出すことを企図させるものとして理解できる。つまり、「D坂の殺人事件」の同時代とは、客観性を保証する要素として〈科学〉を手段とし、不可視の領域にあったはずの〈心〉を道具として利用することに伴う私的領域の公開、内面の可視化が企図された時代であると把握できるだろう。そのため、本稿においてはヴァルター・ベンヤミンが一九三六年に発表した論文「複製技術の時代における芸術作品」において提出された「視覚的無意識」という概念をテクスト分析に導入する。彼に拠れば「視覚における無意識的なものは、カメラによってはじめて私たちに知られる。それは衝動における無意識的なものが、精神分析によってはじめて私たちに知られるのと同様である」³⁾のだという。日常的な処理速度を停止させ、通常のコミュ

二ケースションとは別の位相にある深層構造を浮かびあがらせることで「細部 Details」を発見する精神分析の手法をカメラ的描写——視覚的（細部）の拡大・分析——と並行的に捉えることで世界認識の構造を発見することを試みるベンヤミンの方法を援用することで「D坂の殺人事件」の読解を行うことは、精神分析と視覚情報の交差点を再度測定しつつ、乱歩テクストの参照点を従来のものに補足し、同時に新たに設計することの試みとなるだろう。

1 「見る」ことをめぐるテクスト／「殺人事件」が発見されるまで

「D坂の殺人事件」は（見る）ことがストーリーを駆動する構成要因となっている。例えば、次の一文をもってテクストが開幕することはそのことを端的に示している。

それは九月初旬のある蒸し暑い晩のことであった。私は、D坂の大通りの中程にある、白梅軒という、行きつけのカフェで、冷しコーヒーを啜っていた。（中略）私はその晩も、例によって、一杯の冷しコーヒーを十分もかかって飲みながら、いつもの往來に面したテーブルに陣取って、ボンヤリ窓の外を眺めていた。（傍線部論者、以下特に注記無き場合は同様）

E・A・ポー「群衆の人」の露骨な影響下にあることで知られるこ⁽⁴⁾

の「D坂の殺人事件」の冒頭であるが、ここで語りの主体である「私」は「眺め」という行為の主体としても設定されている。「私」の視線の先には「明智小五郎」の「幼馴染」でもある「細君」の働く「古本屋」がある。「私」は「細君」に対する「一寸特別な興味」から「十分程も同じ所を見詰め」続け、「じつと目で待って」いる。やがて、「白梅軒」には「明智小五郎」も訪れ、「私」と「明智小五郎」はともに「古本屋」を「凝視」し続けながら、「犯罪や探偵に關した」「無駄話」を行う。あらゆる痕跡がたちまち消えてゆくような都市の成立に「探偵小説」の根源を見出したのもまたベンヤミンであり、⁽⁵⁾その際にベンヤミンが念頭に置いたテクストこそがポー「群衆の人」であったが、ベンヤミンはまた、「群衆の人」に「探偵小説」の骨格——追跡者、群衆、未知の相手からなる三者——の存在と同時に、「犯罪」という要因の欠落を指摘している。他方、「D坂の殺人事件」において「私」と「明智小五郎」は執拗に都市の（細部）を（見る）ことを通じて「犯罪」という要素をテクスト上に発見する。巨視的な都市という領域の全体とその（細部）を（見る）こととの差異、つまり情報処理密度の量的変化が、認識の質的変化を達成させることを端的に意味するその「瞬間」は次のように記述されている。

だが、ある瞬間、二人は云い合わせた様に、黙り込んで了った。さつきから話しながらも目をそらさないでいた向こうの古本屋に、ある面白い事件が発生していたのだ。

「明智」と「私」は「古本屋」で次々と「本泥坊」が発生していることに気づく。ここには「ボンヤリ」という冒頭の拡散的視線から「目をそらさない」という集中的視点への変化、つまり〈他者〉の秘密を覗きこもうとする能動的な窃視への欲望の位相の変貌も確認できる。

そして、二人は「本泥坊」に「家の人」がまったく気づかず「店」とその奥の居住空間は閉ざされた「障子」に分断されたままであることに疑問を覚える。「私」はこの状況に対し、「犯罪事件でもあつて呉れば面白い」と思いながらカフェを出て、「古本屋を訪れるに至る。

この「私」の「面白い」という感覚は、近代化のもたらした可視化の外的状況と〈心〉の領域の接近を象徴する。何故ならば、ここで「私」と「明智」が行っている〈見る〉という行為とは、観察可能な事実を理論の根拠とする〈科学〉的なものの見方そのものであると把握できるためである。〈見る〉ことで「事件」の「発生」を観測することとは、物理現象を対象化し客観性へと還元する態度に他ならない。それは〈科学〉的認識とそれを支える視覚的な諸技術よつて可能になる〈細部〉を発見する明晰さを仮構する身振りなのである。そこでは人々のもつとも遠くに隔てられてあるべき混沌としての「犯罪事件」が、「私」の眼前に露出されることを導き、「私」はそのことに「面白」さを感じていると理解できる。つまり、このテキストにおける〈見る〉こととは、人が通常は気がつかぬ空間、闕がとり払われた意識の下層部の発見のメタファーでもあるのだ。

ところで、ポー「群衆の人」を経て「D坂の殺人事件」に至るまでには、いくつかのテキストが直接的に、あるいは間接的に經由されている。〈見る〉ことよつて「殺人事件」が発見されることの歴史性を辿つてみよう。それは、この「私」の「面白い」という感覚の歴史性を辿る作業でもある。

さて、法学士乙骨三作の下宿は、ある坂の中腹であつて、しかもそれが往來の面よりも二尺ほど低い地面にたつてゐた。だから彼の部屋は、往來（すなはち坂）に面した二階にありながら、道をとほる人の顔と、室内にすわつてゐる彼の顔とが殆ど同じくらいの高さになるので、窓をあけはなして、押し入れの戸をもあけておいて、その寢床の上に横臥しながら、往來のはうを見わたすと、往來の人は、まさか押し入れの中に人がゐるとは思はないから、誰も見てゐる者のない空の部屋のもりで、無関心な態度で通つて行くので、彼は通つて行く人々を手取るやうに眺めることができた。

引用は、乱歩「屋根裏の散歩者」の着想の基となつた宇野浩二「屋根裏の法学士」（「中学世界」一九一八年一〇月）からの一節であるが、ここにあるのは視線の非対称性である。見られずに〈見る〉ことが行われているテキストであるが、このテキストにおいて〈見る〉ことの欲望は、〈他者〉の私秘的なものに向かわず、匿名の表情を眺める段階

にある。「乙骨」にとつて（見る）こととは、「芝居でも見るようなつもり」であり、彼は積極的に（他者）の秘密を暴き出そうとはしない表層的な観察者に留まつている。だが、この（見る）ことの欲望の位相は、次のように深化していくこととなる。

その頃私は、宵の程を常に賑やかな場所でも過ごさずには居られない男だつた。白書の中はどうかこうか自分の部屋に落着いて居られるけれど、そこらが隅々から蒼々黄昏れて行つて、ぼつと燈火の点き初める頃になると、漠然とした空虚が何処からともなく忍び寄つて、私の心をあらぬ寂寥に誘ひ入れる。と、私は定まつて壁上に懸けた鼠色のソフトをと取り、外套の襟をそつと立て、ふらふらと戸外へ出て行くのだつた。目ざす所は大抵そこらの珈琲店とか、劇場、寄席、乃至は活動写真館なぞである。（中略）併しそんな盛り場に在つても、私の心の空虚は満たされた事が無かつた。只私は満たされぬとは知り乍ら、それでも何かしら自分を待つてゐるものがあるやうな気がして、毎夜、徒らに燈火の下を漁り暮らしてゐたのである。

引用した久米正雄「エロスの戯れ」（「文章世界」一九一七年四月）では、表層的観察に興じている宇野テクストに対し、自ら能動的に「心の空虚」を「満たす」何かしらを求めている。この「私」もまた「珈琲店とか、劇場、寄席、乃至は活動写真館なぞ」といった（見る）

対象を欲望しているが、それは「何かしら」と規定されている以上、明瞭な対象として描出されていない。だが、「D坂の殺人事件」の文脈には、「群衆の人」から連綿と続く、（見る）ことをめぐるある鬱積があることを、引用した二つのテクストは告げてくるだろう。そのことは「D坂の殺人事件」というテクストを彩る無数の書籍の堆積——「古本屋」、「明智」の部屋、先行する「探偵小説」への言及——として象徴的に記述されている。つまり、「D坂の殺人事件」とは、その鬱積した欲望の日本近代文学における臨界点の一つとして把握できる。

都市化によつて（他者）との全面的な隣人化がおこるとともに心理的境界が設定され、同時に生のひとつひとつの場面がそれが本来おかれていたコンテクストから遊離し、断片化され、ひとつの均質な流れの中ですべて呑み込まれてゆく。そしてそのように混在された生の諸断面は、巨視的な全体性に立つ限り、いかにしてももの統一性を回復することはない。だが、その境界を攪乱し、不可視の部分を微視的に侵犯しようとする欲望もそこには同時に発生してくる。「D坂の殺人事件」とは、このような不穏な欲望を充足するべき「殺人事件」の発見めぐるテクスト群の臨界点として把握できるだろう。「D坂の殺人事件」の「私」と「家の人」はまったく面識なく名前さえ知らない関係であるが、「私」は「面白い」という感覚に導かれ「障子」という私的領域（プライベート）の扉を開け放ち、推理と称して内面の秘密（心）を（見）ようとすることは、このような歴史的な文脈で理解できる。

また、このような文脈を背景とする（心）を言語化する言説は、同

時代の「探偵小説」をめぐる諸言説と深く関連している。例えば、千葉亀雄の次の一文を参照してみよう。

探偵小説は、神秘性と科学とが握手して始めて最高潮なもの、最も新味のあるものが成り立つ（中略）凡そすべての人間の行為の中で、罪悪ほど人間の心理を強迫するものはない、また真剣なものはない。罪悪は決して遊戯ではない。一步あやまれば死ぬか生きるかの境だ。だから人間の心理ほど、複雑で、神秘で、内観的なものがなく、またそれだけ外からのぞき悪いものはない。⁶⁾

千葉のような「神秘性と科学」の「握手」を「探偵小説」の可能性とみる言説とは、「のぞき悪い」という「人間の心理」を（科学）を媒介に（見る）ことを導いてくる。（科学）、つまり「心理学」や「精神分析」にもとづく合理性の言説化作用を召喚し、そして個人の内面（心）の決定不能性へ客観性のメスを入れることこそが、「探偵小説」に求められていたという同時代文脈は、看過されてはならない。他方で、（細部）を徹視的に（見る）ということの意味をベンヤミンは次のように定義している。

拡大撮影というのは、（これまででも）不明確になら見えていたものを、たんに明確にすることではなく、むしろ物質のまったく新しい構造組成を目に見えるようにすることである。

我々の文脈に即してみよう。ここには、都市という場の巨大で全体的な欲望と並行的に、分子的に無数に存在する回収不可能な多様な欲望の流れが生産されており、そのことによつて全体を揺るがすような分子的な（細部）が発見されるというモチーフが提示されていると理解できるだろう。そして、そのような構図は、次のような具体的な記述としてテクスト上に現象している。

表の大通路には往来が絶えない。声高に話し合つて、カラカラと日和下駄を引きずつて行くのや、酒に酔つて流行唄をどなつて行くのや、至極天下泰平なことだ。そして、障子一重の家の中には、一人の女が惨殺され横たわつている。何という皮肉だ。私は妙にセンチメンタルになつて、呆然と佇んでいた。

「古本屋」の「障子」を通過した「私」と「明智」はその奥で「細君」の死体を発見する。ここでは巨視的な都市という（外部）||「表の大通路」の「天下泰平」に対する「障子紙一重」という境界線を通じた（内部）||（細部）としての「家の中」という位相があり、「私」と「明智」は「一人の女が惨殺」されたという「殺人事件」を都市の（細部）||「古本屋」を「眺め」ることで発見する。つまり、二人の行為は、表面的イメージの平面から突出するような（細部）を発見することによつてその場面を変遷させることであるといえる。そして、

ここで注目すべきは「私」の「センチメンタル」の吐露だろう。一見すると、小さな地縁社会とは異なる〈外部〉と〈内部〉の断絶という状況の成立する東京という都市の抱える人間関係の希薄さに対する嘆息として理解可能なこの「センチメンタル」の一語なのだが、それは表層的な理解にすぎない。「表」と「家の中」という〈全体〉と〈細部〉を対比しその落差を分析することこそがここでは求められている。そのためには、「明智」の次の発言は見越すことはできない。

僕はこの事件によって、うわべはきわめて何気なさそうなのに人の裏面に、どんなに意外な陰惨な秘密が隠されているかということ、まざまざと見せつけられたような気がします。それは実にあの悪夢の世界でしか見出すことのできないような種類のものだったのです。

巨視的な〈外部〉の位相と微視的な〈内部〉の位相の対比を精確になぞるこの「明智」の発言は「私」の「センチメンタル」と呼ぶるものである。「うわべ」＝「何気なさそうなの人生」という巨視的・拡散的な視線と「裏面」＝「意外な陰惨な秘密」という微視的・集中的な視線の対比的な構図がここでも反復されている。

確認しておけば、「D坂の殺人事件」の物語内容は、「古本屋」の「細君」が「被虐色情者」であり、隣家の「旭屋」という「蕎麦屋」の主人が「惨虐色情者」であったというサディストとマゾヒストの姦通の

結果、行為が行き過ぎたために「細君」を死にいたらしめ、そのことを「明智」が論証することを試みる物語であるというように要約できるが、このように隠された〈心〉の「秘密」の領域が「探偵」行為によって露出することこそが「私」にとつて「センチメンタル」として感じられるのであり、「明智」にとつては同じ事が「悪夢の世界」であると認識される。都市という〈表面〉では群衆に埋没し、匿名化され抹消される「個人」の領域を微視的に分析し、「個人」という領域を可視化させて「秘密」を暴露し、不可視の関係を白日のもとに晒すことが〈見る〉ことの歴史性を通じてなされているのが「D坂の殺人事件」というテキストなのである。だが、留意しなければならないのは、「私」と「明智」がまったく同質な存在として描かれているわけではない、ということだろう。そのことは同一の事象に関して二人が感じた事——「センチメンタル」と「悪夢の世界」という認識の差異として象徴的に捉えられるのだが、そのことを含めて次節以降において検証しよう。

2 「私」の「センチメンタル」／二つの「探偵法」

まずは、「明智」と「私」の関係を確認しておこう。対象の〈外部〉をさらに対象化し、「犯罪」を〈見る〉ことを通じて微視的に観察・発見するというプロセスを共有する両者であるが、まず、「私」という存在は次のように自己規定されている。

当時私は、学校を出たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿屋にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽きると、当てどもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬカフェ廻りをやる位が、毎日の日課だった。

「私」とは都市の雑踏の内側でこれといったやるべきことを持たず、無目的に日々を過ごす存在として設計されている。そして、そのような「私」にとって、「明智」は次のように認識されている。

私は、かくも風変わりな部屋の主人である明智小五郎の為人について、ここで一応説明して置かねばなるまい。併し彼とは昨今のつき合いだから、彼がどういう経歴の男で、何によって衣食し、何を目的にこの人世を送っているのか、という様なことは一切分からぬけれど、彼が、これという職業を持たぬ一種の遊民であることは確かだ。強いて云えば書生であろうか、だが、書生にしては余程風変わりな書生だ。いつか彼が「僕は人間を研究しているんですよ」といったことがあるが、其時私には、それが何を意味するのかよく分からなかった。唯、分かっているのは、彼が犯罪や探偵について、並々ならぬ興味と、恐るべき豊富な知識を持っていることだ。

「私」の一人称で語られるテキストである「D坂の殺人事件」において、「私」にとっての「明智」は「犯罪や探偵について、並々ならぬ興味と、恐るべき豊富な知識を持つている」存在、そして「遊民」であることを除いて「一切分からぬ」存在であるという認識が語られる。それは、「私」と「明智」もまた互いの認識を共有していないことを意味する。そのことは、「細君」殺害の犯人を「私」は「明智」であると推測することからも明らかであるが、テキスト上では、「私」と「明智」の同質性と差異は次のような言説群から抽出できるだろう。

それは兎も角、明智と私とは、その夜帰途につきながら、非常に興奮して色々話合ったものだ。

都市の中で「犯罪」という非日常を希求し「探偵」への誘惑に流される「私」と「明智」の同質的な位相は「興奮」の一語に集約されている。彼等は都市の内部に混ざり込みながら都市の〈細部〉を観察対象とし分析する存在である。「遊民」という言葉がそのような存在であることを意味するのは次の資料で確認できる。

高等遊民の増加は、極端なる分業制度の弊である。何人も、分業制度が人類社会に与えた功績を認めない訳には行かないが、一人人格を機械化し、個性を劣弱ならしむる点に於いて、其害毒の大なる事を認めざるを得ない。(中略)決して健全なる状態を以

て目する事は出来ないが、第十九世紀以来の科学的文明は、之を吾人に強いる。即ち此等の人々は、最早独立して、自主的な生活を営むに堪えず、何等かの外力を藉つて、僅かに其生を支える。彼等に価値があるとしたら、それは他の附属物としての派生的価値である。(中略) 勿論其数は極めて少ないものであろう。けれども、少いからと云つて軽蔑する訳には行かない。何故ならば、天下を驚かす様な事をするのは、何時も斯う云う極めて少数の人であるからである。高等遊民問題は、今も昔も社会の一問題たる事を失わぬ。⁷⁾

「遊民」とは「人格を機械化」し、「個性を劣弱ならし」める「分業制度」という社会状況から逸脱する存在として規定され、「人類社会」という全体性から遊離し「天下を驚かす様な事をする」存在であるとされる。職業を持たず「社会」から距離をおき、「犯罪」に「興奮」する「私」と「明智」の欲望は相同的であり、彼等の興味は「犯罪」という「個人」にとって知られたくない(心)の「秘密」を暴露する「探偵」行為に結びつく。彼等は共に(細部)を覗き見る欲望に貫かれた存在なのである。また、彼等がともに「犯罪」に関心を寄せることが意味するのは、それが自身の欲望を代行することをどこかで自覚していることでもあるだろう。では、彼等の差異はどこにあるか。両者の差異は、明智自身の言葉で次のように語られている。

読者諸君、私がこういつて詰めよつた時、奇人明智小五郎は何をしたと思います。面目なさに俯伏して了つたでも思うのですか。どうしてどうして、彼はまるで意表外のやり方で、私の荒肝をひしいだのです。というのは、彼はいきなりゲラゲラと笑い出したのです。

「いや失敬失敬、決して笑うつもりではなかつたのですけれど、君は余りに真面目だもんだから」明智は弁解する様に云つた。「君の考えは却々面白いですよ。僕は君の様な友達を見つけたことを嬉しく思いますよ。併し、惜しいことには、君の推理は余りに外面的で、そして物質的です。例えばですね。僕とあの女との関係についても、君は、僕達がどんな風に幼馴染だつたということ、を、内面的に心理的に調べて見ましたか。(後略)」

この箇所からも明らかのように「奇人」という「明智」の規定は「私」からの「明智」の内面の不可視を端的に示している。そして、「私」の「明智」に対する疑いに対して「余りに外面的で、そして物質的」であると「明智」は述べる。そして自身の方法に関して次のように述べている。

「で、君は犯人の見当がついているのですか」
「ついでいますよ」彼は頭をモジャモジャやりながら答えた。「僕のやり方は、君とは少し違うのです。物質的な証拠なんてものは、

解釈の仕方でもなるものですよ。一番いい探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです。だが、これは探偵者自身の能力の問題ですがね。兎も角、僕は今度はそういう方面に重きを置いてやって見ましたよ。」

「私」と「明智」を区分する要素として、ここで「私」がもちいるのは「外面的」で「物質的」な「探偵法」であることに對し、「明智」は「内面的」、「心理的」な「探偵法」であるという構図が提示されている。そして、「明智」の「探偵法」には具体的な参照元が設定されていることも、テキストには明記されている。

彼はそういって、彼の周辺の書物の山を、あちらこちらから発掘していたが、やがて、一冊の古ぼけた洋書を掘りだして来た。

「君、これを読んだことがありますか、ミュンスタールヒの『心理学と犯罪』という本ですが、この『錯覚』という章の冒頭を十行許り読んで御覧なさい」

私は、彼の自信ありげな議論を聞いている内に、段々私自身の失敗を意識し始めていた。

「ミュンスタールヒの『心理学と犯罪』とは、Hugo Münsterberg の『Psychology and Crime』(London: T. Fisher Unwin, 1911) のことであり、同書は「明智」の「議論」とともに「私自身の失敗を意識

し始め」させる機能をテキスト内に生成している。そのことは、「外面的」／「物質的」に對する「内面的」／「心理的」な「探偵法」の優位を導いてくる。同時に、明智の提示した〈真相〉——サディストとマゾヒストによる姦通の果ての事故死——における「外面的」／「物質的」な「証拠」の不在も次のように語られている。

併し物質的の証拠というものは一つもないのです。だから、警察に訴える訳にも行きません。よし訴えても、恐らく取上げて呉れないでしょう。それに僕が犯人を知りながら、手を束ねて見ているもう一つの理由は、この犯罪には少しも悪意がなかったという点です。変な云い方ですが、この殺人事件は、犯人と被害者の同意の上で行われたのです。

このように「内面的」／「心理的」な「探偵法」は意味の秩序の規範として「ミュンスタールヒの『心理学と犯罪』」を媒介とし、「物質的の証拠」の不在をもって蓋然性のもとに想起される「犯罪」と「犯人」をテキスト上に創造する。ここで「犯罪」とは動機を持たなくても発生するという視点が導入され、そのことを保証する方法論として、メカニズム精神の機構をめぐる〈科学〉の枠組みへの暗黙の信仰が提示されている。そのことを象徴的に示す描写は次の一文であろう。

そうして、私達はある横町で分かれを告げた。其時私は、横町

を曲つて、彼一流の肩を振る歩き方で、さっさと帰つて行く明智の後姿が、その派手な横縞の浴衣によつて暗の中にくつきり浮出して見えたのを覚えていた。

「くつきり浮出して見えた」この「明智」の「後姿」は、「明智」の存在を特権化する表象として把握できる。これは「私」と「明智」を区別するのみならず、(公的な知)との差異化を析出させる描写でもある。テキスト上で(偽り)として提示される「外面的」／「物質的」な「探偵法」と(真実)の出来事を導く「内面的」／「心理的」な「探偵法」とを隔てる距離に関して最も重要なことは、誤つた推理の存在だろう。先に触れたように、「私」の「外面的」／「物質的」な「探偵法」が導き出した誤つた結論とは「明智」＝犯人説なのだが、そのことを導いた理由として「私」には「友達に一人の新聞記者」があり、「それが例の事件の係りの小林刑事」との「懇意」であることは看過できない文脈である。「私」は「新聞記者の友達の伝手で、小林刑事に頼んで指紋」を調べることさえできる存在として規定されている。この犯行現場に唯一残された「明智」の「指紋」という「物質的」証拠をもつて「私」は「明智」の犯罪を論証しようと試みるが、「明智」は次のように反論している。

今の指紋のことも、じきに分かりましたから、僕も妙に思つて検べて見たのですが、ハハ……、笑い話ですよ。電球の線が切れて

いたのです。誰も消しやしなかったのですよ。僕がスイッチをひねつた為に燈がついたと思つたのは間違で、あの時、慌てて電燈を動かしたので、一度切れたタングステンが、つながつたのですよ。スイッチに僕の指紋丈けしかなかったのは、当たり前なのです。

「私」の推理とは現場の巨視的な全体性から「指紋」の意味を捉えることであり、そのことに対し、それ自体としては取るに足らない「電球の線が切れていた」という(細部)の微視的な構造的な位置から犯行現場を変成させるような異化の効果を明智は提示している。明智の提示する手続きとは、「物質的」な存在の背後に隠されているかもしれない意味を探ることによつては、解決は得られず、偽りの第一印象が課してくる意味の領域を括弧にくくり、課せられた意味の領域に含まれた(細部)をそこから取り出して、その(細部)に注意を集中することである。つまり、「明智」と「私」は(細部)への注目の解像度において差異化されているといえる。そのような認識の差異を象徴的に表す言葉こそが「センチメンタル」と「悪夢の世界」という事件への「私」と「明智」の態度の差異としてあらわれる一語なのである。たとえば、「私」は「明智」の(動機)を次のように推理している。

僕はこういう風に考えるのですよ。一人の荒い棒縞を着た男が、——その男は多分死んだ女の幼馴染みで、失恋という理由なんか

も考えられますね——古本屋の主人が夜店を出すことを知って
いてその留守の間に女を襲ったのです。

この推理が（細部）を欠いた巨視的・拡散的なものであることは明白
だろう。「明智」の（動機）は「私」の「センチメンタル」とい
う（細部）を抹消するような感傷によって導き出されたものなのであ
る。ここにおいて「私」の「外面的」／「物質的」な「探偵法」が、
テクスト上では（細部）を欠き、「内面的」／「心理的」な「探偵法」
に対して劣位にある理由は明らかだろう。「明智」は「細君」との関係
を次のように語っている。

僕とあの女の関係についても、君は僕達がどんな風な幼馴染だっ
たかということ、内面的に心理的に調べて見ましたか。僕が以
前あの女と恋愛関係にあったかどうか。又現に彼女を恨んでいた
かどうか。君にはそれ位のことを推察出来なかつたのですか。あ
の晩、なぜ彼女を知っていることを云わなかつたか、その訳は簡
単ですよ。僕は何も参考になる様な事柄を知らなかつたのです。
僕は、まだ小学校へも入らぬ時分に彼女と分かれた切りなので
からね。

「外面的」／「物質的」な「探偵法」では「明智」と「細君」の関
係は「幼馴染」であるという事実は突き止められても、「どんな風な幼

馴染だったか」は判断することができない。そのため、「センチメン
タル」という感傷の入りこむ空白が生成される。つまり、（客観性）を
装うように「外面的」／「物質的」を前景化した「私」の推理は、実
は語り手である「私」が「読者」を想定し語り、そしてその「読者」
の前に（他者）の「秘密」を暴露しようとする自身の欲望を晒すとい
う構造を備えている。そのことが明瞭に現れているのは次の引用箇所
だろう。

さて、殺人事件から十日程たったある日、私は明智小五郎の宿
を訪ねた。その十日の間に、明智と私とが、この事件に関して、
何を為し、何を考え、そして何を結論したか。読者は、それらを、
この日、彼と私との間に取交された会話によって、十分察するこ
とが出来るであろう。

「私」を駆動しているのは（他者）の中に隠された欲望を発見し、
それを暴露するという快楽であり、「明智」を犯罪者にするこゝで、自
己身をせんとする欲望なのであり、同時に「読者」へ自らの知った
ことを公開する欲望である。つまり、「センチメンタル」という感傷
は、自らの欲望を満足させるための欲動によって生成されていると理
解できるだろう。

それでは、「私」の「外面的」／「物質的」な「探偵法」においては
「センチメンタル」と把握される事件Ⅱ（偽り）が、「内面的」／「心

理的「な探偵法」においては「悪夢の世界」Ⅱ（真相）として把握されたのはいかなる理由によるだろうか。「明智」の推理に関しての検証を次いで試みよう。

3 「悪夢の世界」を回避すること／欲望の充足と（他者）

小林洋介は「D坂の殺人事件」における「明智」の推理を次のように分析している。⁽¹⁾

考えてみれば、「D坂の殺人事件」で「私」に語り聞かせる明智の推理は、それ自体は必ずしも説得力のあるものではない。（中略）読者が、明智の推理が正しかったと十分に納得できるのは、最後に旭屋の主人が自首したからだ。仮に犯人の自首がなかったとしたら、読者としては、明智の唐突な説明だけでは彼の推理の正当性を十分に納得することはできない。もし明智によるこのような唐突な推理が説得力を持っていたのだとすれば、その背景にはおそらく、「D坂の殺人事件」を取り巻く文脈としての、異常性欲者と犯罪をめぐる言説が、「私」にとっても当時の読者にとっても信頼できる（科学）として受容され、認知されていたからだろう。

小林の指摘するように「D坂の殺人事件」における「明智」の謎解

きとは犯人の異常な欲望Ⅱ「サード」、「惨虐色情者」／「マツゾホ」、「被虐色情者」という関係性を暴露し、異常性欲に関する（科学）言説を背景にその正当性を担保するものであるといえる。そして、小林論で想定されているのは例えば次のような（科学）言説である。

マゾヒズムにありては、精神的性慾生活の一種固有なる倒錯症にして、之に罹れるものは、其色慾的感情及び思考に於て異性のもの意志に全然、且、無条件に屈服し、其支配を受け、圧迫せられ、暴行を加へられんとするの観念より満たさるゝなり。⁽²⁾

サディズムやマゾヒズムといった性癖を（異常性欲）と定義し、医学的分類・分析対象とするこのような言説は（異常性欲者）と犯罪者が接続されるイメージを反復・強化する。「明智」の次のような発言は、確かにこのような同時代文脈を強く想起させるだろう。

旭屋の主人というのは、サード卿の流れをくんだ、ひどい惨虐色情者で、何という運命のいたずらでしょう、一軒置いて隣りに、女のマツゾホを発見したのです。古本屋の細君は彼に劣らぬ被虐色情者だったのです。そして、彼等は、そういう病者に特有の巧みさを以て、誰にも見つけられずに、姦通していたのです。

ここには、（異常性欲者）を「そういう病者」と見なすという明智の

認識があり、「病者」は「姦通」も「特有の巧みさを以て」行う存在であるという短絡的な提示がなされている。このような明智の推理の背景には、引用したような〈精神科学〉の言説、つまり人間の心理のメカニズムが方程式のように解明できるという〈客観〉を疑わない姿勢が存在している。このような小林の論は同時代の文脈を視野に入れる場合において一定の説得力を備えているだろう。だが、「それ自体は必ずしも説得力のあるものではない」と断罪する「明智」の推理には、幾分かの解釈の余地と、補足すべき事が存在する。それは「D坂の殺人事件」というテキストの物語が、ある循環構造を持つていることと関係している。「D坂の殺人事件」は内容的に二部に構成が分割されている。一方は「(上) 事実」と題され、他方は「(下) 推理」と題されており、前者は「古本屋」で「私」と「明智」が「細君」の死体を発見し、警察による捜査がはじまるところまでが、後者ではそれから「十日程」経過し、「明智」の下宿での「私」と「明智」の推理の場面が語られる。「(上) 事実」で提示されているのは語られていないことの空白、つまり誰が「細君」を殺したのかという主題であり、「D坂の殺人事件」とはこの空白のまわりを巡る物語であると把握できる。そして「(下) 推理」で行われているのは、〈細部〉の手がかりを解説することによって失われた空白を再構成しようとする「探偵」たちの企図である。そのため、「D坂の殺人事件」もまた想定される主部を欠き、「殺人」の前後だけが語られる抑圧を含んだ物語ということになる。そして、結末にいたっては、「明智」が物語全体を直線的な形で語って聞か

せ、すべての空白を埋めることによって「事実」を再構成できたときにはじめて、われわれは本来の秩序が恢復されたはずの物語に到達することになる。

「探偵」が微視的な視線で〈細部〉を〈眺める〉ときに、「殺人事件」は発見される。それは全体性に対する内的な衝撃であり、かつ全体性に統合不可能な出来事である。なぜならそれは巨視的な現実の平板さから突出しているように見えるからである。この発見の瞬間から、巨視的には「天下泰平」に見えていた世界が、微視的には恐ろしい可能性を秘めた「悪夢の世界」であることが暴露される。社会の現実が衝撃の排除によって成立している以上、決して充足されないはずの欲望が「犯罪」として具現化しているからである。日常的現実が本質的には「悪夢」を内包するという「明智」の世界認識とはこのような理由による。そして、「探偵」の役割とはまさしく、内的なショックを再度象徴化することで、世界の擬似的な平板さを恢復することであると捉えられる。つまり、「探偵」の存在そのものが、無法的継起から法則的継起への変貌、〈異常〉を〈正常〉に変換し再確立を保証することとなる。そのため、「探偵」とは明白なパターンを欠いた無意味な〈細部〉の散乱——本泥坊、死体、色情者、傷——の中から隠された意味を見抜き、あるいはなんらかの〈細部〉の欠損——物的証拠の不在——を意味あるものとして捉える機能として存在している。あるいは、次のようにも規定できるだろう。「探偵」とは、存在するだけですべての〈細部〉が遡及的に意味を持つことを保証するのだと。

だが、「D坂の殺人事件」における「推理」は実のところ、このような根本的な秩序の回復に失敗している。具体的にテクストに則して検証してみよう。「私」が疑うように、「明智」は殺人者になりえたかも知れない。「細君」の死体は物質的位相では、「犯罪」を希求——「面白い」、「興奮」——していた「私」や「明智」を容疑者の集団として構成し、殺人の動機と機会を分有させる。したがって、「D坂の殺人事件」における「探偵」とはこの分有されたこの罪悪感を単一の主体の中に位置づけることよって自らの無罪を証明する行為を行う存在であるといえる。「私」と「明智」の行為は、自身が犯人たりえた可能性をいっさい否定することで、自身の内的な「真実」——実際の殺人事件による集団の欲望の実現に対する、無意識における殺人者としての自己と、同時に外的な「真実」——「私」と「明智」の推理」の外れる可能性をも否定することなのである。事実の〈正確〉さ、この場合は同時代〈科学〉言説における〈異常性欲〉と「犯罪」の固着的イメージと内／外的な「真実」との差異と距離が、ここで利用されている。〈正確〉な事実により、「探偵」は内／外的な「真実」と向き合わず、自身の欲望が実現した事に対する罪悪感から目を背け、欲望の実現の責任は「探偵」が示した「犯人」という〈他者〉ひとりに負わされる。したがって、「D坂の殺人事件」における「解決」とはいわば実現された幻覚のようなものであり、先行論が指摘する「正当性を十分に納得することはできない」理由はここに由来する。「私」の「探偵」法とは「明智」をスケープゴートとして自らの罪悪感を幻覚的に投射するこ

とであり、「明智」の推理とは〈真実〉を「内的」／「心理的」な「探偵法」によつて創造することであると定義できる。その意味では、「明智」と「私」とは同質の欲望を備え、かつ自らの欲望のリスクを〈他者〉に投影することで回避する共犯者であるともいえる。そして、このことよつてもたらされるのは自身の欲望が「犯人」に代行されることで実現し、そこにいかなる対価も不要であることで得られた大きな快感であり、それは次のように表象されている。

私は、明智のこの異様な結論を聞いて、思わず身震いした。これはまあ、何という事件だ！

末尾付近の「私」の「明智」の推理の「異様な結論」を聞いた際この反応は次のような意味として理解できる。結果的に「D坂の殺人事件」は、「私」と「明智」の〈他者〉の秘密を覗見、暴露することへの欲望とともに、自らの抱える「犯罪」への欲望も充足され、同時にその「犯罪」を「犯人」という〈他者〉に外在化し〈真実〉を創造することで、罪悪感からも解放される結末をむかえたのだと。「私」の「身震い」や「—」の興奮はこのような快感の中で感受されるものである。ベンヤミンはこの欲望の構造を次のように説明している。

技術の普及の結果、大衆のなかにどんなに危険な心理的緊張——それは危機的な段階に至れば、異常心理的な性格をもつことに

なる——が生み出されたかを考えてみると、同時に認識されてくることがある。つまり、まさにこの技術の普及のおかげで、そのような大衆の異常心理を防ぐための心理的な予防注射の手段も作り出されているということである。この手段とは、ある種の映画である。サディズム的な空想やマゾヒズム的な妄想を不自然に展開させることで、そのような映画はこの空想や妄想が大衆のなかで自然に成熟する危険を防ぐことができる。¹³⁾

ある物語において「サディズム的な空想やマゾヒズム的な妄想を不自然に展開させる」ことで、欲望の現実化を防ぐというこの映画の機能は、「明智」と「私」の推理においても同様の効果を生じさせているだろう。そして、自らの〈心〉にあつた「悪夢」Ⅱ〈犯罪者〉としての自己を回避し、すべてを〈他者〉化し、自閉的に内在することを希求する「D坂の殺人事件」を貫く欲望は次の結末をもって充足されている。

そこへ、下の煙草屋のお上さんが、夕刊を持って来た。明智はこれを受取って、社会面を見ていたが、やがて、そつと溜息をついて云つた。

「アア、とうとう耐え切れなくなつたと見えて、自首しましたよ。妙な偶然ですね。丁度その事を話していた時に、こんな報道に接するとは」

私は彼の指さす所を見た。そこには、小さい見出しで、十行許り、蕎麦屋の主人の自首した旨が記されてあつた。

テキストの末尾でもある引用の一文は「新聞」における「犯人」の「自首」という報道による代補として機能している。つまり、本質的には蓋然性にすぎない「明智」の「推理」に偶然的な補足物として追加された報道が彼等の〈無罪〉を保証するのである。報道が蓋然性に取って代わつて〈真実〉となる構造が意味するのは、「明智」という「探偵」の「推理」を保証する物質性としての「新聞」の存在であり、「内面的」／「心理的」な「探偵法」では届き得ない物質的なものが「犯罪」を最終的に規定するという審級の位相をテキストにもたらしている。もちろん、「新聞」もまた原理的には推測やジャーナリズム的考察を取つた物語の形式なのだが、ここでの「新聞」とは〈他者〉の「秘密」の正統性を〈客観〉として担保し、そこに自らの「悪夢」を排出する「探偵」たちの欲望が具現化したものとして機能する強度を物語言説のレベルで保持している。¹⁴⁾そして、そのこともまた「社会面」を「見」るという欲望によつて発見されるものとして描かれているのである。これらの「推理」とそれを代補する「新聞」によつて、「事件」は「私」と「明智」の男性同士の緊密な絆で閉じられた世界において、テキストの循環Ⅱ推理の可能性の更新を停止し、彼らの欲望を充足するための物語として成立することとなる。

結語

本論は「D坂の殺人事件」とは、〈見る〉ことの欲望にまつわるテクストであると規定した。そして〈見る〉ことにおいて発見されるのは「殺人事件」という全体性の世界認識の構造に亀裂をもたらす要素である。そしてそのような「殺人事件」に対する秩序回復の方法として「私」と「明智」の二種類の「推理」の方法を検証しつつ、そこに現れる欲望の位相に関する分析を行い、彼等の「推理」とは自らの欲望を認識し充足させる行為であると定義した。つまり、「私」と「明智」の「推理」とは欲動的情報の処理速度／密度を変換し、自らの無意識の欲望を可視化し、認識するようなベンヤミンの指摘した精神分析と視覚情報の交差点上でとらえる言説の反復として把握できるのである。そのことはテクストの持つ循環的構造、不在の〈空白〉——誰が「殺人」を犯したのか——の充填を欲望する物語構造と相通的であることは、先に確認したとおりだ。つまり、「D坂の殺人事件」とは「探偵」が〈真実〉を〈真実〉にふさわしく語り、それを「新聞」という〈客観〉が保証したときに終わるのである。

したがって、「D坂の殺人事件」が創造するのは、事実ではなく、意味の領分ということになる。推理を通過し、生成された意味によって、物語は再構築される。本稿は、「D坂の殺人事件」というテクストの〈細部〉を可視化する欲望／可視化された欲望とその代償無き充足を描くテクストとしての側面を照射することで、以上のような分析結果を提

示する。

注

- (1) 松山巖『乱歩と東京 1920 都市の貌』(PARCO 出版局、一九八四年二月)
- (2) 同時代の心理学の受容に関して、一柳廣孝は「乱歩誕生前夜の大正後期には、新しい先端文化としての科学技術への関心の高まり」を指摘し、「科学への過剰な期待感、人間心理に対する明晰な解釈格子としての精神分析を引き寄せた」と述べている(一柳「心理学・精神分析と乱歩ミステリー」、「解釈と鑑賞別冊 江戸川乱歩と大衆の二十世紀」所収、二〇〇四年八月)。これに対し石原千秋は「この小説の主張の一つは科学的な思考に対する異議申し立てにある」(石原「D坂の殺人事件・江戸川乱歩」、『短編の愉楽①近代小説のなかの都市』所収、有精堂、一九九〇年二月)とする。同時代文脈の受容に関しての精緻なものとして、小林洋介「他者の心理を〈科学〉的に〈探偵〉すること」(『狂気』と〈無意識〉のモダニズム)所収、笠間書院、二〇一三年二月)をあげることができる。
- (3) 引用は『ベンヤミンコレクション1 近代の意味』(浅井健二郎編訳、久保哲司訳、筑摩書房、一九九五年六月)に拠る。
- (4) 両テクストの描写の類似に関しては井上健「翻訳された群像——「群衆の人」の系譜と近代日本」(『比較文学研究』一九九

六年(二月)に詳しい。

- (5) ヴァルター・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」、参照は『ベンヤミンコレクション4 批評の瞬間』(筑摩書房、二〇〇七年三月)
 - (6) 千葉亀雄「近代小説の超自然性」(改造)一九二三年九月
 - (7) 「高等遊民問題」(東京日日新聞)一九二〇年五月八日
 - (8) 同書を含む乱歩のこの時期の精神分析に関する受容に関しては、大内茂男「江戸川乱歩と心理学」(『江戸川乱歩全集』第十卷、講談社、一九七九年九月)を端緒とし、近年では中原雅人「江戸川乱歩『心理試験』の精神分析」(『大衆文化』二〇一三年九月)において精緻に分析されている。
 - (9) 「明智」の〈知〉のあり方に関して、すが秀実は「探偵Ⅱ遊民(フラヌール)のイレギュラーな知」として、「警察」的な「レギュラーな知」から逸脱する「探偵」法と捉えている(すが『探偵のクリティック』思潮社、一九八八年七月)ことに對し、小林洋介は前掲書において同時代的な「心理学」や「精神分」の受容を背景とした明智の〈知〉は、「レギュラーな(科学)」であると指摘している。本稿においては、「明智」と「私」の「探偵」法の対立と、「私」と「警察」の相同性を理由に明智の〈知〉を(公的な知)から逸脱する物としてテキスト上では描出されていると判断している。
 - (10) 「探偵小説」における(動機)の恣意性に関してはジークフ
- (11) 小林前掲書
 - (12) クラフトⅡエビング『変態性慾心理』(大日本文明協会、一九一三年九月)
 - (13) 注(3)に同じ
 - (14) 「新聞」と「犯罪」の関係に関しては、次の指摘が参考になる。「日本における昭和初年、江戸川乱歩の登場期において、新聞と推理小説は合わせ鏡のように、相互に参照しながら犯罪という形で現れる社会的現実を記述している。犯罪という欲望

と衝動によって強く動機づけられた行為の解釈は、その行為に
対する観察者（民衆・読者・受け手）が、解釈の枠組みを作り、
理解するという営みからなっている。」（成田康昭「新聞と犯罪
文化——怪事件と探偵——」、『江戸川乱歩と大衆の20世紀に
関する総合的研究』所収、二〇〇七年五月）

※「D坂の殺人事件」の引用は、『江戸川乱歩全集第1巻 屋根裏の散
歩者』（光文社、二〇〇四年七月）に拠る。

（くりたすぐる 本学大学院博士後期課程在學生）